

【SS】届け！

ニアラで久しぶりに雪が降った12月24日。

この日琴樹は初めて雪が降るのを見て、

そして初めて本物のサンタを見ることになった。

「うそでしょ…ッ!？」

広間では、チームのお祭り隊長こと音斬兄弟主催でクリスマスパーティーがにぎやかに行われている中、やつてられないと執拗な双子の誘いを全力で断った琴樹は、自分でひっそりリンへの手紙を考えていたところでした。

それが突然部屋の電気が消えたかと思うと、ドアをギイと不気味に軋ませて現れたそのシルエットはまさしく、

「サンタ…クロース…!？」

廊下から差し込む光は逆光で顔は良く見えないが、ふかふかのファーがついた帽子と衣装に身を包んだこの人物の職業は、おそらく夜中に家に入り込んで靴下の中にあるとかそれとかぶちこんでいくタイプとしか思えません。

そのサンタっぽい彼(?)は無言のまま、空の大きな袋を片手にじっと琴樹を見ています。それまるで狩人のような…、動きのすばやい動物を一気にしとめようとしているようです。

と、そこで琴樹は重要なことに気づきました。

黒いのです。

サンタの身にまとっている衣装がファンキーでファンシーな赤ではなく、それこそ不法侵入して金品を奪っていく人たちを思い起こすような黒だったのです。

『仮にサンタがいたとしても、普通のサンタがくるとは限らないよね?』

そういえば今朝、サンタからのプレゼントに胸を躍らせる水鳥やゆうに対して麗斗はこう言っていなかっただろうか。

『ブラックサンタって言ってるね、黒い衣装を着たサンタさんがいるんだよ。その人は悪い子のところに現れて、こわいものを置いていたり子供を袋の中に入れてどこか遠くに連れて行っちゃうんだよ。チーム(うち)には赤いほうのサンタさんがくるといいね!』

さてここでもう一度状況を整理してみよう!

完全丸腰な協調性0かつ口の悪さチーム1の琴樹くん↑悪い子

→部屋の入り口に立ってる黒い衣装のサンタさん↑多分ブラックサンタ

→めっちゃくちゃ大きい袋所持↑多分琴樹も入る

「えっ、えっ、うそっ、えっ、そんなあつ…!？」

麗斗の言葉が時間差で発動したように一気に部屋の温度が下がった気がしました。

「さ、サンタなんか迷信だろ、ま、ましてブラックサンタなんか、ほ、ほ、本当にいるわけっ、ないだろっ、」

そう強がりながらも、琴樹はその場から動くことができません。

ブラックサンタは動かないまま、袋を抱えて静かに立っています。

「やだ、そんな、いやだよっ! 僕はリンと幸せになるまでし、しねないんだからなっ! おい! いるだろ! 誰かつ! いないのかよッ!！」

マジビビりの琴樹くん。震える声で叫びながらできるだけヤツから遠くへ離れようと立ち上がりますがそこで腰を抜かしてしまいました。

「ひっ、」

その時でした。ブラックサンタは一瞬で琴樹との間合いをつめ、琴樹の胸倉を捕らえました。

「う、うわあああああつ! いやだあああああだれかあああそういちそういちそういちたすけろようわあああああッ!」

命の危機を感じ、プライドとか羞恥心とか全部捨ててなりふりかまわず泣き叫ぶ琴樹。最強最悪の兄・霜一に助けを求めるあたりもうなんか色々臨界点に達してますね。

そんな琴樹を見てサンタは少し笑ったあと一言、
『眠れ』
その言葉を最後に、琴樹の意識は途切れたのだった。

琴樹君ありがとう、君のことはみんな忘れないよ……

みんな琴樹抜きでクリスマスパーティー超盛り上がりつつあるけど忘れてないよ……

いやほんと、忘れてないよ……

忘れてなんて……

『起きろ』

声で目を覚ますと、琴樹の目の前に広がっていたのはにぎやかなクリスマスパーティー。ただし、テーブルを囲んでいるのはチームの馬鹿連中ではなく、懐かしいキンディ

ネスの両親っていうか、リン。リンが居ます。ここ重要。

「うそー 本当にコトが来てくれるなんて うれしいなあ」

「え？ ん？ あれ？ リン、あれ。」

「メリークリスマス！ ですよ、琴樹さん」

えへへ、と後ろで笑ったのはサンタルックの蒼慈。手にはあの大きな袋。

「……………は？」

「僕からのクリスマスプレゼントです！ よろこんでもらえましたか？」

「……………は？」

急展開すぎて文字通り目が点な琴樹。まったく状況についていけてません。リンが

いつもどおりかわいいということしか理解できてないです。そんな琴樹に蒼慈は照れたように頬をかいて、

「琴樹さん、キンディネスでクリスマスを通じたって言ってたんで、ゼペットさんに言って座標移動の言霊でココまで送ってもらったんです……！ びっくりさせたくてちよっと強引なやり方になっちゃいましたけど……」

そうなのです、琴樹との厚すぎる隔たりをどうにかしたい蒼慈は、クリスマスにプレゼントを贈ることを思いついたのでした。しかし、琴樹のことですから、何か物をあげても一蹴されてしまうでしょう。そこで颯火葬屋音斬麗斗に相談したところ、こっそりキンディネスに連れて行って驚かせるというサブライズ計画が立ち上がったのでした。

ちなみに、格好をわざわざブラックサンタにしようとか言い出したのは颯火と葬屋だったりします。

「ありがどうね、蒼慈くん！ いつもコトの家族と私の家族でクリスマスはすごすから、コトがいないときびしくて……、チームのみんなともパーティーあったのに、よかったの、コト？」

「えつ、う、ううん！ 全然いいんだ！ 僕もリンとクリスマスを通じたかったし……………！」

「よかったあ」

ここで読者のみなさんに琴樹の胸のうちをそっと公開しよう。

（ええうそ本当にリンとクリスマス通じせるの本当になにこれ恋人みたいだどうしようドキドキしてきたうふふあはははどうしよう恋人にみえたらどうしよういやまあそのうちなるけどというかリンかわいいなもう何着ても可愛いなみなうちにもた可愛くなつたなどうしようドキドキするどうしよう）

要約・めっちゃテンパってます

「そうだ」蒼慈くんもよかったら一緒に……………」

「あ、僕は大丈夫ですから。僕は琴樹さんをここに送りにきただけですし、」

「本当にいいの？」

「ええ、じゃあ僕はこれで……」

蒼慈、空気を読んでそそくさと退散。扉をしめて、ふう、と一息。

『本当に良かったのかよ蒼慈いっ』

珍しく静かだった霜一がやっと開放されたとはかりにウーンと伸びをしながら言った。

「いいの。僕は琴樹さんが喜ぶことがしたかっただけだもの。僕が居たら琴樹さん絶対怒るしすごい目でにらまれるし……」

『は、ちがいないえ。しかし、こんなに敵身的な弟を邪険にするなんてコトキチなんてやつなんだ……』

「兄さんがそれを言うの？」

「だいたいお前の所為。」

そんなことを話しながら村を出ようとしていると、

「おい！」

とん、と肩を叩かれて、振り返ると息を切らした琴樹が立っていました。

「あれ、琴樹さん、どうしたんですか……？ あ、もしかして僕なにか忘れ物を……っ！」

「お前ら、これから何で帰るつもりなの？」

「え？ 夜行列車に乗って行くのかと……」

「やっぱりね……、列車だとラングアゲまで何日かかると思ってるんだよ。クリスマスパーティー終わってるどころ騒ぎじゃないよ？」

「まあそうですけど……、僕、琴樹さんが部屋に引きこもってる間に結構楽しみましたし……」

「……あ、そお」

控えめに言う蒼慈に、琴樹はそっけない態度をとりつつもまだ何か言いたそうです。

「……あー、だからさ……」

ガシガシと頭をかいて、琴樹は意を決して蒼慈の腕をつかんだ。

「戻るよ！」

「え？」

「リンが待つてるんだよ！ 蒼慈くん一人で帰ってかわいそうっていうし！」

「えっ、え、でも、僕列車が……夜になるとなくなってる……」

「僕の家泊まっていけばいいでしょ！」

「ええ！？ そんな、本当に、いいんですか……？」

「いちいちしつこいな！ 僕がいろいろ言うんだから黙ってついてきなよ！」

「こ、琴樹さん……ッ！」

ズカズカ進む琴樹に感動して涙すら浮かべる蒼慈。ついに、グランドキヤニオンぱりの埋めがたい琴樹との関係性に改善の兆しが見えましたよ！お赤飯です！いつかは皐月のアレのようにフラットな関係に《不適切な表現があったため削除されました》蒼慈は、思わぬ友情イベントの発生に、これってサンタさんからのプレゼントかな、とクリスマスの魔法を感じたといいます。

めでたしめでたす

『しっかしよお、琴樹くんのビビリ具合と言ったら最高だったなア？ 情けない顔してよお全然俺たちだって気づかないんだもん、明らか小さいじゃんなあ？ なんだっけ。たすけてそういちーだっけ。ずっと名前呼んでくれなかったのになあ、俺あんなに頼りにされてたなんて知らなかったぜ。お兄さんちよつと感動しちゃった！ これからもよろしくなことk』

「黙れこの変態悪霊がアツ！ おまえみたいな口の減らない無神経非常識な悪言まがいのバケモノなんかと誰が仲良くするか！ 友達以下ミミズ以下だ！ しね！」

霜一の言葉にバシーンと振り払われる蒼慈の腕。

この瞬間に、友情の架け橋は幻となって消えました。

やっぱりこいつの所為ですね。

「に、にいさんのばかあああああああッッッ！！」

『ことつち、何俺の弟泣かしてんだよ!』

「お前だよッ!!」

そんな着慈の正月の抱負は、兄さんをどうにかする、になったといひます。